

# 他者志向性への自己肯定感とソーシャルサポートとの関連

田中 圭・宮前 淳子\*  
(大学院教育学研究科) (学校教育)

760-8522 香川県高松市幸町 1-1 香川大学大学院教育学研究科  
\*760-8522 香川県高松市幸町 1-1 香川大学教育学部

## The Interaction of Self-affirmation to the Other-directedness and the Social Support

Kei Tanaka and Junko Miyamae\*

*Graduate School of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

*\*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

**要旨** 本研究では、高校生の“空気を読む”傾向を他者志向性の高さとしてとらえ、他者志向性への自己肯定感とソーシャルサポートとの関連について検討することを目的とした。その結果、ソーシャルサポートが十分に得られない中で他者志向性が高い場合には、自己を肯定的に受け止められないことが明らかとなった。このことから、自分を認めてくれる他者の存在が、空気を読む自己への肯定感に影響を及ぼしているのではないかと考えられた。

**キーワード** 他者志向性, 空気を読む, 高校生, セルフモニタリング, ソーシャルサポート

### 問題と目的

現代の青年の友人関係の特徴として、互いの内面を開示することなく、友人との深い関わり合いを避け、傷つけあわないように気を遣ったり、形だけの円滑な関係を求めるといった傾向が指摘されている(栗原, 1989, 松田, 2007, 岡田, 1995, 千石, 1991)。また、東京都立多摩教育研究所(2000)は、中学生が友人関係で「その場の雰囲気にあわせ」、「自分が悪く思われないように」気を遣っていることが多いことを明らかにしている。指南役(2008)も、現代の若者は、仲間から浮くことを極端に嫌い、常に仲間と同調しようとすることを指摘している。このような青年像は、日常場面において、「空気を

読む」という行動によく表われているのではないだろうか。

空気を読むことに関して和田(2007)は、子どもは学校で浮いた発言をすると、「空気が読めないやつだ」といったブーイングが起こるため、仲間はずれにされることを恐れていると述べている。その一方、場の空気にひたすらあわせて多数派を外さないように生きることは、おそらくどんな人でも、窮屈で息苦しいだろうと論じている。また齋藤(2007)は、空気を読む力を、表情からかすかな変化を感じ取る力とし、現代社会では、相手の言葉にならないニーズや心情を的確にくみ取って、円滑なコミュニケーションを行う能力が必要とされていることを指摘している。他にも、山本(1977)や冷

泉 (2006) が“空気”について述べているが、いずれにおいても、“空気を読む”ことの定義について明確にされていない。そこで本研究では、齋藤 (2007) を参考にし、“空気を読む”ことを、「その場の集団あるいは相手の言葉にならないニーズや心情を的確にくみ取って、円滑なコミュニケーションを行う」と定義する。

本研究で扱う“空気を読む”ことに類似した概念として、セルフモニタリングがあげられる。セルフモニタリング (Self-Monitoring) とは、「状況や他者の行動に基づいて自己の表出行動や自己呈示が社会的に適切なのかを観察し自己の行動を統制すること」と定義される (Snyder, 1974)。人は自分の社会的行動を決定する際に、行動の適切さを示す外的な手がかり (他者の行動など) と、自己の感情や態度などの内的な手がかりを用いる。外的な手がかりに重点を置くなら、セルフモニタリング傾向が高く、内的な手がかりに重点を置くなら、セルフモニタリング傾向が低いと言える (岩淵, 1996)。

岩淵 (1996) によれば、典型的なセルフモニタリング傾向の高い人 (以下, HSM) は、自分の社会的行動がその場の状況に適切かどうかのヒントに非常に敏感である。その場にふさわしい行動をとるため、社会的、対人的な手がかりに素早く反応し、自分の社会的行動を状況に応じて変える努力をする。このため、行動と本当の気持ちが一致しないこともある。反対に、セルフモニタリング傾向の低い人 (以下, LSM) は、自己呈示に必要な情報には比較的うとく、自己呈示用のスキルをあまり持っていない。自分をその状況に当てはめるのではなく、本音・性格・内的価値観で自分を表現している人である。場所や時間に関係なく行動に一貫性を持たせようとするから、自分の行動と本当の気持ちが一致することが重要だと考える。岩淵・田中・中里 (1982) によれば、セルフモニタリング傾向の高さは、外向性、他者志向性、演技性の3つの下位尺度から構成され、測定される。外向性は、社会的な事柄への関心度

が高く社交的な傾向を示し、演技性は、場に応じて様々な役割を演じる傾向である。一方、他者志向性は、ある状況で適切な行動をとることへの関心度の高さや自己の感情の統制力を示しており、この他者志向性が高い人は、他人を喜ばせるために自分の行動を変える能力が高いとされている (下村・関口・工藤, 2005)。本研究で定義した“空気を読む”傾向は、岩淵他 (1982) の他者志向性に近い概念ではないかと考えられる。

他者志向性についての先行研究では、社会的な状況での笑いとの関連が認められている (桐田・遠藤, 1999)。例えば、他者志向性の高い人は、他者志向性が低い人よりも、2人以上、または1人だが周囲に人がいる状況でよく笑うことが明らかにされている。しかし、他者志向性が高い人が、社会的状況で自分の行動を変化させることを、いいことだと思っているのか、悪いことだと思っているのかについては明確でない。では、他者志向性が高い青年は、自分のそうした行動をどのように評価しているのだろうか。

他者志向性が高いことは、相手と上手くやっていくために必要な適応的な能力として肯定的に理解されているかもしれない。しかし水野 (1994) は、自らの意に反した行動をしたとき、HSMの方がLSMよりも不快感や憂鬱感、怒りが時間をおうごとに増加することを明らかにしている (水野, 1994)。また、心理的距離をとる一方で同調的な交友関係を持つ青年には精神的不安定さが見られ (上野・上瀬・松井・福富, 1994)、「冗談を言って相手を笑わせる」、「楽しい雰囲気になるようにふるまう」など楽しく軽躁的な友人関係を取る青年は、全般的に適応感が高く健康的ではあるものの、高校年代では現実自己と理想自己の間の距離が大きく、自己不一致状態にあることが示されている (岡田, 2002)。これらのことから、他者志向性が高い青年のなかには、集団内では一見適応的であっても、自己に対する肯定感が低い者も少なくないのではないかと考えられる。

では、他者志向性への自己肯定感に影響を与

える要因はなんだろうか。福谷・皆川(2002)は、高校生の自尊感情は、受け取ったソーシャルサポートの量が多いほど高くなることを明らかにしている。ソーシャル・サポートとは、普段から自分を取り巻く重要な他者に愛され大切にされており、もし何か問題が起こっても援助してもらえらという期待の強さのことをさし(岡安・嶋田・坂野, 1993), 知覚されたサポートの水準が高いことは、過去に他者からサポートを受けた経験が多いことや他者との親密度が高いこと、すなわちサポートの入手可能性に対する期待が高いことを意味している(岡安他, 1993)。伊勢谷(2005)は、高校生を対象とした研究で、大切だと思う集団において自分を主張したり存在感を感じたり、仲間を受容している者は、そうでない者よりも自己受容が高いことを明らかにしている。そして、高校生にとって、どのような集団であってもその人が自己主張したり、自分の存在を感じることができる集団の存在が大切であると述べている(伊勢谷, 2005)。このように、ソーシャルサポートは、青年の自尊感情や自己受容に影響を与える要因のひとつであると言える。本研究で検討する他者志向性への自己肯定感にも、家族や友人など身近な人からのソーシャル・サポートが影響を及ぼしているのではないだろうか。つまり、空気を読むための努力を分かってくれるような他者との関係や、空気を読むことで発生するストレスをねぎらう場所を有していることで、空気を読んで自分に対して肯定的でいられるのではないかと考えられる。

以上のことから、本研究は、他者志向性への自己肯定感と家族や友人などの身近な人からのサポートがどのように関連しているかを検討することを目的とする。具体的には、他者志向性とソーシャルサポートの高低により、調査協力者を4群に分類し、それらの自己肯定感の違いについて検討を行う。本研究を通して、「空気を読む」という行動の主体としての青年の心理について検討し、自己肯定感を高めるようなサポートの在り方について考えたい。

## 方法

### 調査時期および調査協力者

2008年9月、公立高校1～3年生589名を対象として、クラスごとの一斉法により無記名形式で質問紙調査を実施した。性・学年に記入もれのあったものを除き、583名を分析対象とした。詳細な人数構成はTable 1に示す通りである。

Table 1 調査協力者の人数構成

	男子	女子	計
1年	96	93	189
2年	97	88	185
3年	94	115	209
計	287	296	583

### 調査内容

以下の3つの尺度と自由記述から構成される質問紙調査票を用いた。

①他者志向性：Snyder(1974)のセルフモニタリング尺度の日本語版(岩淵他, 1982)の3つの下位尺度のうち、他者志向性の質問項目を用いた。

セルフモニタリングの個人差を測定するものとしては、Snyder(1974)のセルフモニタリング尺度と、Lennox&Wolfe(1984)の改訂版セルフモニタリング尺度がある。Snyder(1974)によるセルフモニタリングの定義と本研究における「空気を読む」ことの定義から、本研究では、質問内容が、「…できる能力をもっている」という能力的側面に重点を置いたLennox&Wolfe(1984)の尺度よりも「現実に…という行動をしている」という行動的側面に重点を置いたSnyder(1974)のセルフモニタリング尺度が適していると考え、その日本語版(岩淵他, 1982)を用いることとした。他者志向性の各項目について、「あてはまる」から、「あてはまらない」までの5件法により回答を求めた。なお、質問項目を高校生にとってわかりやすくするために、「パーティや集まり」の記述を「委員会や授業」の日常的な言葉に変更した。同様の理由で「喜劇」を「おもしろいテ

レジや映画」に変更して用いた。

②他者志向性への自己肯定感：他者志向性の各質問項目に対して、「そういう自分をどう思いますか？」と尋ね、「とてもよいと感じる」から、「とても嫌いである」までの5件法により回答を求めた。

③ソーシャルサポート：学生用ソーシャルサポート尺度（岡安他, 1993）を用いた。「あなたがする話を、いつもよく聞いてくれる」「ふだんからあなたの気持ちをよくわかってくれる」「あなたが落ち込んでいると元気づけてくれる」などの16項目について、身近な人を一人想定してもらい、「きっとそうだ」から、「絶対ちがう」までの4件法で回答を求めた。

④自由記述：「空気を読んで行動することがイヤになることがありますか？」という問いに「ある」、「ない」の2件法により回答を求めた。続けて、「空気を読むということについて、どう思いますか？」と教示したうえで、自由記述式により回答を求めた。

## 結果

### 他者志向性尺度に関する分析結果

#### (1) 因子分析結果

岩淵他（1982）の他者志向性尺度は大学生を対象に作成されたものである。本研究では、高校生を対象としているので、一因子構造であることを確認するため因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。その結果、4因子が抽出された。第2因子には2項目、第3因子は1項目、第4因子は1項目で構成されており、解釈が困難になることから、第1因子に負荷量が高い7項目（1,2,3,6,9,11,12）を用いることとした。再度、因子分析をした結果、1因子が抽出された（Table 2）。また、Cronbackの $\alpha$ 係数は.66であり、ある程度の信頼性が認められた。

#### (2) 学年別・性別の分散分析結果

学年および性別によって、他者志向性尺度の平均値に差が見られるかどうかについて検討するため、2要因の分散分析を行った。Table 3は

他者志向性の学年別、性別および全体の平均と標準偏差、学年×性の2要因分散分析結果を示したものである。

他者志向性では性の主効果が認められ、男子よりも女子のほうが有意に高かった（ $F(1,571)=4.03, p<.05$ ）。学年の主効果（ $F(2,571)=1.09, n.s.$ ）および交互作用（ $F(2,571)=0.12, n.s.$ ）は認められなかった。

### 他者志向性と他者志向性への自己肯定感との関係

他者志向性と他者志向性への自己肯定感の相関係数を算出したところ、 $r=-.17$ であり、ほとんど相関は認められなかった。空気を読む傾向の高さと、そういう自分への肯定感との間にはほとんど関連が見られないことが明らかとなった。

### ソーシャルサポート尺度の因子分析結果

岡安他（1993）のソーシャルサポート尺度は中学生を対象に作成されたものである。本研究では、高校生を対象としているので、一因子構造であることを確認するため因子分析を行った。学生用ソーシャル・サポート尺度の16項目について、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行ったところ、第1因子の寄与率が52%以上という高い値を示しており、1因子構造であることが確認された。どの項目に対しても.60以上の高い負荷量が認められた。また、 $\alpha$ 係数も.93以上であり、高い内的整合性が認められた。

### 他者志向性とソーシャルサポートが自己肯定感に及ぼす影響

まず、他者志向性で性差が確認されたことから男女別に他者志向性（Other-Directedness : OD）とソーシャルサポート（The Scale of Expectancy for Social Support : SS）の平均点により調査協力者を4群に分類した。その後、男性と女性でそれぞれ他者志向性とソーシャルサポートが共に平均以上である群を第1群としてひとつにまとめ、HOD-HSS群と命名した。同様の手続きを他3群についても施行した。他

Table 2 他者志向性尺度項目の因子分析結果

質問項目	I	共通性
2 自分を印象づけたり、他の人を楽しませようとして、演技することがある。	.653	.427
1 本当は楽しくなくても、楽しそうにふるまうことがよくある。	.557	.310
9 実際に感動しているかのようにふるまうことがある。	.535	.286
6 仲良くやっていたり、好かれたりするために、他の人が自分に望んでいることをする方だ。	.465	.216
11 よかれと思えば、相手の目を見て、まじめな顔をしながら、うそをつくことができる。	.393	.155
3 本当はきれいな相手でも表面的にはうまく付き合っている。	.383	.147
12 いろんな場面でどうふるまっていかわからないとき、他の人の行動を見てヒントにする。	.307	.094
固有値	2.36	
寄与率 (%)	33.71	

Table 3 性と学年を要因とした分散分析結果

学年・性別	1年生			2年生			3年生			群	F-Value		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計		学年	性別	交互作用
他者志向性	23.53 (4.82) <sup>a)</sup>	24.1 (4.56)	23.81 (4.69)	23.92 (4.66)	24.68 (4.54)	24.28 (4.61)	23.98 (5.12)	25.02 (4.57)	24.55 (4.84)	1.09n.s.	4.03*	0.12n.s.	
N	95	93	188	97	87	184	93	112	205		男<女		

a) ( ) 内は標準偏差

\* p&lt;.05

\*\* p&lt;.01

\*\*\* p&lt;.001

Table 4 他者志向性とソーシャルサポートが自己肯定感に及ぼす影響

群	HOD-HSS群	HOD-LSS群	LOD-HSS群	LOD-LSS群	F-Value
N	(152)	(148)	(128)	(134)	
他者志向性への自己肯定感	21.83 (3.96) <sup>a)</sup>	21.23 (4.09)	22.63 (3.63)	21.81 (3.23)	3.20* HOD-LSS群 <LOD-HSS群

a) ( ) 内は標準偏差

\* p&lt;.05

\*\* p&lt;.01

\*\*\* p&lt;.001

者志向性が平均以上であり、ソーシャルサポートが平均未満である群を第2群とし、HOD-LSS群と命名した。他者志向性が平均未満であり、ソーシャルサポートが平均以上である群を第3群とし、LOD-HSS群と命名した。他者志向性とソーシャルサポートがともに平均未満である群を第4群とし、LOD-LSS群と命名した。

次に、他者志向性への自己肯定感を従属変数として1要因分散分析を行った。その結果をTable 4 及びFigure 1 に示す。その結果、群間に有意差が認められた ( $F(3,558)=3.20, p<.05$ )。Tukey法を用いた多重比較を行ったところ、LOD-HSS群がHOD-LSS群に比べ、有意に自己肯定感が高いことが明らかと

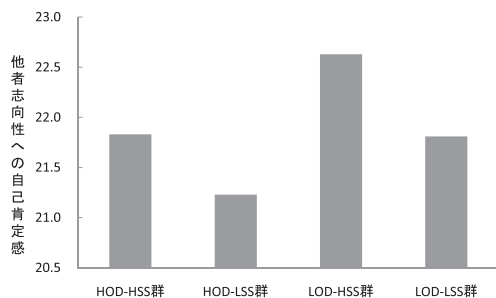


Figure 1 他者志向性とソーシャルサポートの高低により分類した4群の自己肯定感の平均値

なった。

### 自由記述結果

(1) 「空気を読んで、行動することがイヤになることがあるか」の群ごとの度数

「空気を読んで行動することがイヤになることがありますか?」について「ある」、「ない」で答えてもらったものを、他者志向性とソーシャルサポートの平均点により分類した群ごとに、度数を数え割合を算出した。各群の「ある」「ない」と答えた人数をTable 5に示す。その結果、HOD-HSS群で「ある」と答えた人が52%、「ない」と答えた人が48%だった。HOD-LSS群で「ある」と答えた人が61%、「ない」と答えた人が39%だった。LOD-HSS群で「ある」と答えた人が33%、「ない」と答えた人が67%だった。LOD-LSS群で「ある」と答えた人が50%、「ない」と答えた人が50%だった。

(2) 「空気を読むことについてどう思うか」の分類結果

自由記述についての分析は、谷口(2005)を参考に以下の3段階により行うこととした。まず、第1段階として、得られた自由記述を最も端的に表す言葉によるラベルづけ作業である概念化を行った。第2段階として、空気を読むことが調査協力者にとってどのような意味合いを持つのかに着目しつつ、第1段階で得られた概念の意味を、データを参照しながら考察し、小カテゴリの生成を試みた。第3段階では、小カテゴリのなかで類似したものを統合し、空気を読むことをどう思うのかの特徴を構成する大カテゴリの生成を試みた。Table 6に大カテゴリ

Table 5 「空気を読んで行動することが、イヤになることがあるか」の度数分布

	嫌になることが	
	ある	ない
HOD-HSS群	71 (52) <sup>a)</sup>	65 (48)
HOD-LSS群	78 (61)	49 (39)
LOD-HSS群	34 (33)	70 (67)
LOD-LSS群	56 (50)	55 (50)

a) ( )内は%

と小カテゴリ、その具体例を示す。なお、個人が特定されないよう、具体例の一部を改変した。

次に、他者志向性とソーシャルサポートの平均点により分類した群ごとに、大カテゴリの度数を数え割合を算出した。その結果、HOD-HSS群の大カテゴリについては、「積極的スキル」が43.96%であり、他の群と比較して「積極的スキル」と感じている人の割合が高かった。Figure 2にHOD-HSS群の大カテゴリの分類結果を示す。

HOD-LSS群の大カテゴリについては、「大変」が12.77%であり、他の群と比較して「大変」と感じている人の割合が高かった。「ネガティブなスキル」が28.72%であり、他の群と比較して「ネガティブなスキル」と感じている人の割合が高かった。また、「ケースバイケース」が5.32%であり、他の群と比較して「ケースバイケース」と感じている人の割合が低かった。Figure 3にHOD-LSS群の大カテゴリの分類結果を示す。

LOD-HSS群の大カテゴリについては、「積極的スキル」が46.97%であり、他の群と比較して「積極的スキル」と感じている人の割合が高かった。また、「大変」が3.03%であり、他の群と比較して「大変」と感じている人の割合が低かった。Figure 4にLOD-HSS群の大カテゴリの分類結果を示す。

LOD-LSS群の大カテゴリについては、「ケースバイケース」が23.68%であり、他の群と比較して「ケースバイケース」と感じている人の割合が高かった。また、「積極的スキル」が36.84%であり、他の群と比較して「積極的スキル」と感じている人の割合が低かった。「大変」が5.26%であり、他の群と比較して「大変」と感じている人の割合が低かった。Figure 5にLOD-LSS群の大カテゴリの分類結果を示す。

Table 6 カテゴリ分類

大カテゴリ	小カテゴリ	具体例 <sup>a)</sup>
1 積極的なスキル	(1)積極的なスキルとして大切	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーションにおいて大事</li> <li>・集団でうまくやっていくために大切</li> <li>・相手に嫌な思いをさせないために必要</li> <li>・他の人のことを考えているので良い</li> </ul>
	(2)協調性・好転	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その場の雰囲気をよくしてみんなで笑顔で過ごせること</li> <li>・沈んだ空気になった時、明るくすることはよいことだ</li> <li>・仲間の輪に溶け込める</li> <li>・ジョークやウケ狙いがあるので悪くない</li> </ul>
	(3)気遣い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デリカシーにかける行動は避けたい</li> <li>・友達の話をよく聞いてあげること</li> </ul>
2 大変	(1)大変	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大変である</li> <li>・めんどう</li> <li>・難しい</li> <li>・疲れる</li> </ul>
	(2)ストレス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ストレスがたまる</li> <li>・何で他人のために気を遣わなければいけないのだと、とても嫌な気分になることがある</li> </ul>
3 ネガティブなスキル	(1)拒否・嫌悪	<ul style="list-style-type: none"> <li>・空気を読むのは嫌い</li> <li>・思ったことは素直に言うべき</li> <li>・あえて空気を読まない</li> <li>・空気に流されて自分の意見がないというのが嫌い</li> <li>・あまりいいことは思わない</li> <li>・空気を読まなければいけない会話には関わらない</li> </ul>
	(2)評価懸念	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きなようにできなくなってしまう</li> <li>・自分が出せない</li> <li>・しゃべりづらくなった</li> <li>・読まない人と人に嫌われたりすると思う</li> <li>・人目に付く行動はあまりしないようにしている</li> <li>・自分を守ることである</li> </ul>
	(3)我慢	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ただ周りに同調して自分を抑えること</li> <li>・自分の気持ちを抑えて、相手の表情を伺わないといけなくてキツイ</li> <li>・常に気を遣っていなければならないから疲れる</li> <li>・嫌でも我慢して行動しなければいけないことばかりなので仕方ない</li> <li>・自分がなくなってしまう</li> </ul>
	(4)習癖	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕方ない</li> <li>・いやでも続けてしまう</li> <li>・いつも空気を読もうとしている</li> <li>・自分がゆずることがよくある</li> </ul>
	(5)建前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上辺だけでその人たちと付き合っている</li> <li>・本当に自分をわかってくれる友達の前では読まない</li> </ul>
4 当然	当然	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普通。最低限のマナー</li> <li>・KY（空気が読めない）はよくない</li> <li>・その場の空気を壊さないためにもしなければいけないと思う</li> <li>・読めない人がいると腹が立つ</li> </ul>
5 ケースバイケース	(1)ケースバイケース	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時と場合によると思う</li> <li>・適切に対応する</li> <li>・場面によって使い分ける</li> <li>・周りの雰囲気にあった態度をとる</li> <li>・状況を把握すること</li> </ul>
	(2)ほどほどがよい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほどほどがよい</li> </ul>
6 その他	その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・空気を悪くしても、助けてくれる人がいればよいと思う</li> <li>・読めない人に読めというの読めないのだから、無理がある</li> </ul>

<sup>a)</sup> 具体例については、個人が特定されないよう一部を改変した

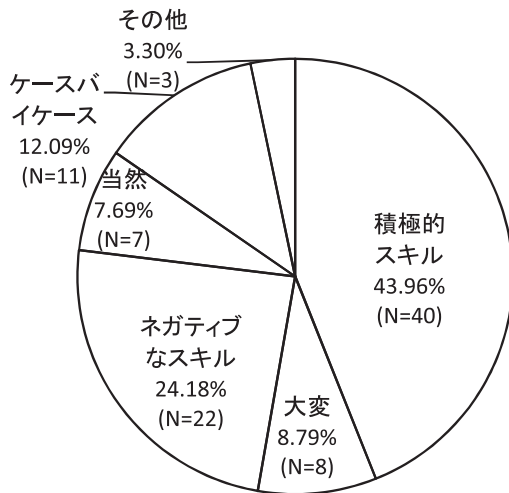


Figure 2 HOD-HSS群の大カテゴリ分類結果

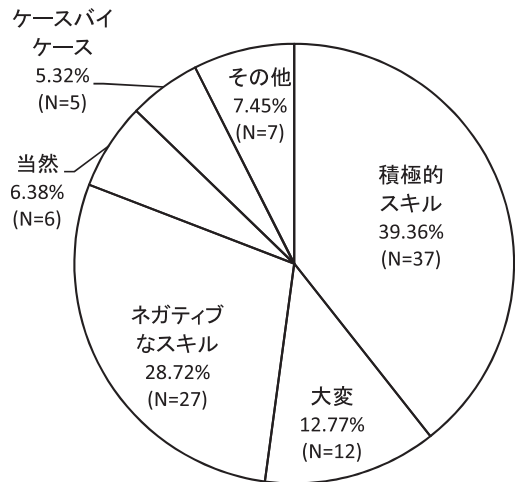


Figure 3 HOD-LSS群の大カテゴリ分類結果

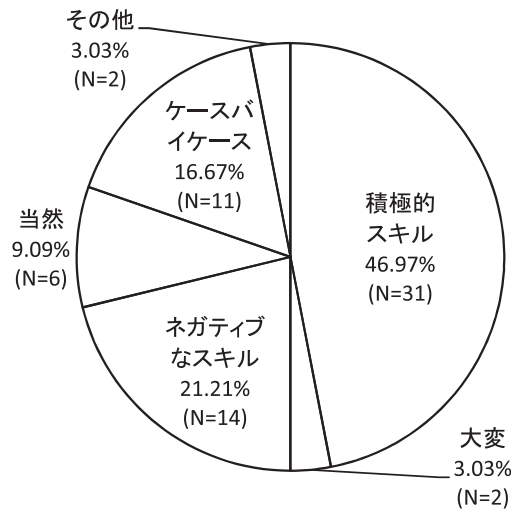


Figure 4 LOD-HSS群の大カテゴリ分類結果

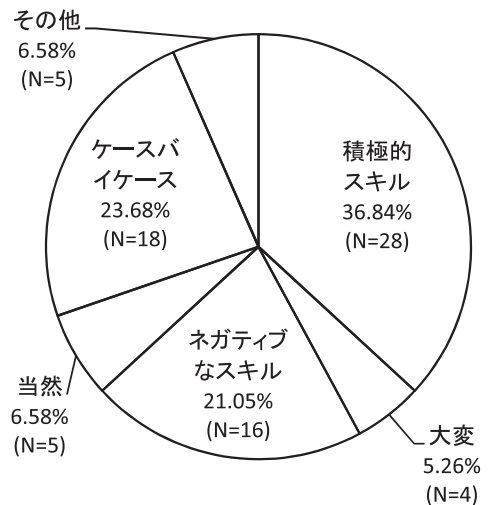


Figure 5 LOD-LSS群の大カテゴリ分類結果

## 考察

### 高校生の他者志向性について

大学生を対象とした先行研究では、他者志向性はセルフモニタリング尺度を構成する因子のひとつであることが確認されている(岩淵他, 1982)。だが、高校生を対象とした本研究では1因子構造であることが確認されず、1因子に絞る際の $\alpha$ 係数も十分な数値が得られなかった。今後は、高校生に適した尺度を新たに作成する必要があるのではないかと考えられる。

また、他者志向性では性の主効果が認められ、男子よりも女子のほうが有意に高いことが明らかとなった。このことから、男子よりも女子のほうが、空気を読むという行動をとる傾向にあると考えられる。一方、他者志向性には学年差がみられなかった。このことから、高校生の段階では他者志向性が年齢の上昇に伴って変化するものではないと考えられる。他者志向性が男女でどのように発達していくのかについては、今後の検討課題としたい。

また、他者志向性と他者志向性への自己肯定



感との間には、ほとんど相関は認められなかった。この結果から、高校生は必ずしも、空気を読む自分を肯定的にとらえているわけではないということが言える。

#### 他者志向性とソーシャルサポートが自己肯定感に及ぼす影響

自己肯定感は、HOD-LSS群よりもLOD-HSS群のほうが有意に高いことが明らかとなった。この結果から、空気を読む（読まない）自分を肯定的にとらえられるかは、空気を読むスキルがあるかどうかよりも、そういう自分を認めてくれる他者の存在があるかどうかの方が重要だと考えられる。では、このような差異がみられたのはなぜだろうか。自由記述によるカテゴリ分類の結果をあわせて考えながら検討したい。

HOD-LSS群は、他者志向性は高いけれどもソーシャルサポートは低い群である。この群は、他の群と比較して、空気を読んで行動することがイヤになることが「ある」と答えた人の割合が、「ない」と答えた人の割合よりも高かった。したがって、空気を読んで行動することがイヤになる人が多いことが明らかとなった。自由記述においては、「空気を読んでばかりいると疲れてくる」、「精神的にキツイ」などと記述しており、「大変」と感じている人の割合が高いことが特徴であった。したがって、空気を読むということのある程度ネガティブなスキルだと考えていることが予想される。また、「ケースバイケース」と感じている人の割合が他の群と比べて相対的に低かった。このことから、その場にあった対応をするなど、人によって柔軟に対応を変えるのではなく、誰に対しても同じ態度でいる人が多いのではないかと考えられる。以上のことから、HOD-LSS群は、誰とでも仲良くするために空気は読まなければいけないと考えており、嫌いな相手とでも仲良くする場面が多いのではないかと考えられる。しかし、ソーシャルサポートが低いことから、そういった努力を誰か理解してもらえないことは少なく、評価されることも少ないのではないかと推察される。そうした要因が、彼らの自己肯定感

の低さにつながっているのではないだろうか。一方、LOD-HSS群は、他者志向性が低く、ソーシャルサポートが高い群である。LOD-HSS群は、他の群と比較して、空気を読んで行動することがイヤになることが「ない」と答えた人の割合が、「ある」と答えた人の割合よりもかなり高いことが特徴であった。したがって、空気を読んで行動することを苦痛に感じない人が多い群であると言える。自由記述においては、「人とかかわるには必要なことだと思う」、「みんな一人で生活しているわけではなく、集団で行動したりする。その中で上手くやっていくためにも空気を読むことは大切だと思う」などと記述しており、「積極的なスキルとして大切」と感じている人の割合が最も高かったことが特徴であった。このことから、空気を読むことを重要視していることがわかる。

それにもかかわらず、同時に他者志向性が低いことは、LOD-HSS群が空気を読めないことを示している。和田（2007）は、空気が読めない原因は、無神経に加えて、「これくらいなら許されるだろう」、「おふざけで盛り上がっているんじゃないか」、「怒っている様子もないから大丈夫だろう」といった慢心の要因が大きいと指摘している。また、本人は一応場の空気は読んだつもりでいるが、その読み方が甘く、読み間違えているとも述べている。このことから、「積極的なスキルとして大切」が高いにもかかわらず他者志向性が低いことは、「これくらいじゃないか」という慢心の高さが背景にあるとも考えられる。

だが、この群の自由記述においては「あえて空気を読まない。」「空気を読まずにスルーする。」などの意見が見られた。橋本（2000）は、社会的スキルがない青年は、表面的な交友関係を消極的に受容せざるを得ないと指摘している。しかし、広実（2002）では、表面的な交友を営む表面群男子においては、むしろ社会的スキルが高いことが認められており、さらに、このような関係にある程度の満足感が認められることから、消極的に表面的交友を受容しているのではないと考察されている。広実（2002）の

見解は、本研究の自由記述にみられた、「あえて空気を読まない」といった姿勢に関連すると思われる。すなわち、一見、他者志向性が低くスキルを持ち合わせていないために空気を読んでいないかのように見える行動は、実はあえてそういう関わり方をしているのだという見方である。したがって、LSMの中にも、空気を敏感に察知するが、あえて空気を読まず、自己の内的要因に基づき行動する人がいるのではないかと考えられる。そして、LOD-HSS群のソーシャルサポートが高いことは、空気が読めない、もしくはあえて空気を読まない態度でも人間関係が円滑であることを示唆している。彼らの自己肯定感が高いのは、空気を読まない自分が他者から受け入れられていることが要因のひとつにあると考えられる。

以上のように、本研究ではHOD-LSS群とLOD-HSS群の他者志向性への自己肯定感に差があることが明らかとなった。この差には、空気を読む努力や、つらさを周囲にサポートしてもらってない不満感が高いというHOD-LSS群の特徴と、空気を読めない自分であっても周囲からのサポートが得られる、言い換えるならば、そういう自分でも受け入れられていることへの満足感が高いというLOD-HSS群の特徴の違いが関連していると考えられる。

## まとめと今後の課題

本研究は、他者志向性への自己肯定感と家族や友人などの身近な人からのサポートがどのように関連しているかを検討することを目的とした。その結果、他者志向性と他者志向性への自己肯定感との間には関連性はあまり見られないという結果が示されたが、他者志向性が低く、かつソーシャルサポートが高い人（LOD-HSS）は、他者志向性が高く、かつソーシャルサポートが低い人（HOD-LSS）よりも、他者志向性への自己肯定感が高いことが明らかになった。これは、ソーシャルサポートが十分には得られない中で、他者志向性が高い場合には他者志向的な自己を肯定的に受け止められないというこ

とだと考えられる。反対に、ソーシャルサポートが得られる場合ならば、他者志向性が低くても、他者志向的でない自己を肯定的に受け止められるということだと考えられる。したがって、空気が読める（読めない）自分であっても、自分を肯定的にとらえられるかは、空気を読むスキルがあるかだけでなく、身近な人からの理解や温かいサポートからも大きな影響を受けているということが示唆された。

今後の課題としては、空気を読むことを測定するための尺度の見直しが挙げられる。今回用いた、Snyder (1974) のセルフモニタリング尺度の他者志向性は、本研究では十分な $\alpha$ 係数が得られなかった。したがって、今後は信頼性や妥当性のより高い尺度を用いて検討を行う必要があるだろう。また、自由記述から得られた「あえて空気を読まない人」は、本尺度では判別することが困難であることも明らかとなった。今後は、空気を読むということの実態をより詳細に把握すると共に、空気を読むことを測定する尺度の作成が必要だと思われる。

## 引用文献

- 橋本剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, 48, 94-102.
- 福谷泰斗・皆川直凡 (2002). 自尊心ならびに適応に及ぼすソーシャルサポートの効果-サポートの受容と期待の交互作用からの検討- 日本教育心理学会総会発表論文集, 44, 244.
- 広実優子 (2002). 現代青年における交友関係の特徴及び性差: 親友との親密度・満足度, 自己受容性, 社会的スキルとの関連 日本青年心理学会大会発表論文集, 10, 34-35.
- 伊勢谷凡子 (2005). 高校生の集団へのかかわり方と自己受容との関連についての研究 九州大学心理学研究, 6, 253-260.
- 岩淵千明 (1996). 自己表現とパーソナリティ 大淵憲一・堀毛一也 (編) パーソナリティと対人行動 対人行動学研究シリーズ5 誠信書房 Pp.53-75.

- 岩淵千明・田中國夫・中里浩明 (1982). セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究, 53, 54-57.
- 桐田隆博・遠藤光 (1999). 男会話における笑いの表出機能 - " laugh-speak " に着目して - 電子情報通信学会技術研究報告. HIP, ヒューマン情報処理, 99, 1-6.
- 栗原彬 (1989). やさしさの存在証明 新曜社
- Lennox, R. D., & Wolfe, R. N. (1984). Revision of the Self-Monitoring Scale. Journal of Personality and Social Psychology, 46, 1349-1364.
- 松田常美 (2007). 青年期における理想の友人関係と対人不安感情が現実の友人関係に及ぼす影響 甲南女子大学大学院論集. 人間科学研究編, 6, 49-65.
- 水野邦夫 (1994). 意に反した行動をした後の態度及び感情状態の変化 - セルフ・モニタリングとの関連 - 性格心理学研究, 2, 38-46.
- 岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 岡田努 (2002). 友人関係の現代の特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達の研究 金沢大学文学部論集. 行動科学・哲学篇, 22, 1-38.
- 岡安孝弘・鴨田洋徳・坂野雄二 (1993). 中学生におけるソーシャルサポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 301-302.
- 冷泉彰彦 (2006). 「関係の空気」「場の空気」 株式会社講談社
- 齊藤孝 (2007). 気の力 場の空気を読む・流れを変える 文藝春秋
- 下村陽一・関口洋美・工藤努 (2005). 欺瞞尺度開発に向けての発達の研究 (1) - 作成された欺瞞尺度によって分類されるパーソナリティ・タイプ - 大阪教育大学紀要, 54, 159-166.
- 千石保 (1991). まじめの崩壊 サイマル出版
- Snyder, M. (1974). The self-monitoring of expressive behavior Journal of Personality and Social Psychology, 30, 526-537.
- 指南役 (2008). 空気のトリセツ 株式会社ポプラ社
- 谷口明子 (2005). 病院内学級における教育実践の特徴 - 質的研究法による実践の特徴カテゴリーの抽出 - 教育心理学研究, 53, 427-438.
- 東京都立多摩教育研究所 (2000). 中学生の友人関係に関する研究 (2) 東京都立多摩教育研究所
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.
- 和田秀樹 (2007). 「場の空気」を読むのが上手な人下手な人 株式会社新講社
- 山本七平 (1977). 「空気」の研究 文藝春秋

### 謝辞

本研究の実施にあたり、アンケートにご協力くださった高等学校の先生方及び生徒の皆様方に、この場をお借りして感謝申し上げます。